

1%の明かり

2021. 7. 29

人間にはタイプというものがある。非常に恵まれた環境にあつて、他の人から見たら、何も言うことはないという人が、案外に、不平を持っていたりすることがある。そういう人は99%が恵まれていて、わずか1%、恵まれていない何かがあつて、そこばかり見ている人である。

一方、もう99%悪いことばかりでも、わずか1%の明かりを見つけて努力するタイプの人もある。こういった人は、どんな状況でも、少しでも明るいほうを見せようとする。だから、自分の苦勞を苦勞とは少しも思わないのである。あの松下幸之助さんなどは、その典型である。

人の上に立つリーダーにとって、大事な資質はというと、後者の方である。悪い点にこだわるのではなく、恵まれた点を伸ばしていくということである。この資質が、人の欠点ではなく、人の長所を見るという特性につながる。

ある人が、社長になったときに、「どんな会社になりたいか」と言われて、「働いても疲れが残らない会社になりたい」と答えた。同じ苦しい仕事をしていても疲れが残る会社と残らない会社がある。

これを学校に置きかえてみる。「どんな学校になりたいか」と言われて、「働いても疲れが残らない学校になりたい」と答える。現実的に考えると、疲れが残らないというのは難しいかもしれない。だが、心地よい疲れ、程よい疲れというものもある。教員たる者、生徒のために苦勞できたと思えば、疲れたとしてもその質が変わってくるように思う。

難しいのは、教員として努力はしているのだが、なかなか成果が見えない場合である。不登校の問題、学力向上の問題、部活動の問題など、目に見える形での変化が起こるのは容易なことではない。教員は、ちょっとした変化に喜びを感じたりしながら、地道な努力を続けている。

人は、仕事の大変さを理解してくれる上司がいてくれると、あまり、つらくはならないものである。わかってきている人の存在というものは大きい。松下幸之助さんは、実によく社員のことを見ていた。だから、松下さんの下では、いくら厳しく言われても部下は働きやすかったと言われる。

これは、生徒にも言えることではないだろうか。先生という存在が、その生徒にとっての理解者となればと思う。

1%の明かりを見つけられる人は、かなり魅力的な人物であるはずである。このような人が、もし教員であったなら、学校はどうなるのだろうか。劇的に変わるような気がする。難しいとはわかっていながらも、1%の明かりを見つけようとする人でいたい、そう思う。